
THE AIR TOWN

一基

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

THE AIR TOWN

【Nコード】

N1762B

【作者名】

一基

【あらすじ】

大学生活に慣れてきた主人公、恭輔に起こる非日常的現象とは…

序章

【序章】

さて、今此処に俺はいるわけだが……

どうした事か

昇るはずの紫煙は地へと墮ち
墮ちるはずの血は天へと昇り

恭輔は暗闇の中、佇んでいた。

「いよいよ頭がおかしくなったか」

そんな事を考えているとやはり脳内の幻影ではないことが証明される。

「お前、人間の癖によくやるな」

と、恭輔は目の前の人間の形をした何かの口をきくのを把握しさらに肩から滴り落ちる。いや、空中に吸い上げられていく血と確かにそこにある痛みを確認し現実だと知る。

次の瞬間恭輔はこう思う

あゝあ、やっちゃったと。

一章

【一章 なんだあれ】

恭輔は大学に今春入学したばかりの青年である。

最近はだんだん生活にも慣れ、そこそこ友人もでき

独り暮らしをしているのもあり友達の家に遊びに行ったり

友人を自宅に泊めたり泊まりに行ったりしていた。

しかしこの平凡すぎるが楽しい日常は悲しくも友人のマンションから帰宅するときに崩れ去ることになる。

黄昏時、恭輔が河川沿いのサイクリングロードを自転車で走っていると

ポケットから携帯端末の呼び出し音が鳴った。

「もしもし??」

「あ、恭輔？」

電話の内容はテレビを見ていたら恭輔が普段電話自宅に行き来するのに通るサイクリングロードで人の首を刈る事件が多発していたため別の道から帰った方が無難ではないかというものであった。

しかし人の話をきかない恭輔は電話を切るとそのままサイクリングロードを突っ走る。

なるほど暫く行くとなにやら人通りが激しく少ない…

しかも、なにやら異様な感覚に陥った。

どんな感覚だと言われても説明不能な感覚に。

流石におかしいと思えば自転車から降りて辺りを見回したところ
真後ろ、それも張り付くような位置に人がいた。
いくら高校時代やんちゃだったとはいえ、停止直後の真後ろに人が
いたら驚かすにはいられない。

「あんたさ、なんか用？」

聞くがそこいる人影はなにも喋らない。
と、思いきやいきなり何かを振りかざしてきた。

「！？」

必死の回避で直撃を避けたが肩を掠めたそれは細長い陽炎のように
歪み、半透明の何かであつた。
おかしい。

すめただけのはずなのに異様に肩が痛いのは何故だ
それきり動かない人影を見て、いやはや人は極限になると何をす
るか分からないもので
痛みを和らげようと、恭輔は新しく煙草に火をつける。
大量に吸って一気に肺に入れるとクラクラしていい気分だ。
しかしそこで気づいてしまった、煙草の煙が昇らないことに。。
肩の血が重力に逆らっていることに。。

「お前、人間の癖によくやるな。」

そう言うと人影は消えていった。
また恭輔はなんださっきのあれは、と思うと同時に
肩の傷を見て

「あゝあ。やつちゃった。」
とつぶやいた。

二章

【二章 侵入者】

あれ以来おかしな人影はでてこない
やはり単なる不審者だったに違いないと恭輔は思いながらも

お前人間の癖にやるな

の一言が気になっていた。

傍から聞けば気の狂った発言にしかとれないが
確かにあの人物は半透明の歪んだもので斬り付けてきた。

「はぁ。。。」

などと恭輔がため息をついていると
家のチャイムがなった。

「んだよ」

悪態をつきながら玄関を出るとそこには奴の 例の不審者 姿
があつた

「上がるぞ」

「あ、ちょ、えっ」

恭輔が戸惑っている というより状況に体が反応しなかっただけ

だが　と奴は勝手に部屋に上がりこんだ。

まことに理解しがたい現象である。

何故此処が分かったのか、なぜ今更になってきたのか。

そしてなによりなぜ今回はいきなり危害を加えるようなことをしないのか。

そのようなことを恭輔が思っていると

「お前も早く来ないか」

そう言われ恭輔がドアを閉めて中に入ろうとすると

「あのお……」

恭輔は驚きのあまり声が出なかった。

どうやらさっきの言葉は恭輔ではなくこの女にかけられたようだ。

続いて女も俺の部屋に入っていた。

部屋の中三人、妙な空気に包まれていた。

恭輔が我慢ならなくなってきたころ

奴らは何もいわず立ち去っていった。

恭輔は戸惑っていた。

この状況はなんなのか。

彼らは部屋に入っていて何を探るでもなく黙り座り込んで

そして長くない時間で消えうせてしまった。

そして一つ気になることといえば恭輔が例のサイクリングロードを通って帰ろうとしたときに電話をかけてきた友人は実は大学に存在しないというのだ。

他の友人に聞いてもそんな人物は知らない。

さらには

そんな事件もしらない。

そういうのだ。

しかもその友人の家は入居者募集中になっていた。

「意味わっかんねえよなあ……」

恭輔はため息をついた。

普通の人間ならこんな状況になったら精神が病んでしまいそうなものだが

恭輔は違った。

「まあ暇だし調べにでもいくか。」

そういうと恭輔はあのサイクリングロードへと足を運ぶ。

今まで幾度か足を運んだがあ那时的様な感覚に浚われる事の無くなつたあの道へ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1762b/>

THE AIR TOWN

2010年10月28日08時34分発行